

2. 柿谷古墳・美濃山遺跡発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、八幡インター線道路整備促進業務に伴うもので、京都府山城北土木事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、八幡市の南側丘陵地の縁辺部に位置する。柿谷古墳は美濃山遺跡の範囲内にあり、道路予定地で遺跡の範囲にかかる部分については、古墳の周囲を含めて調査することとなった。付近には、狐谷横穴群、女谷・荒坂横穴群、王塚古墳、美濃山廃寺跡などの遺跡が分布している。

柿谷古墳は八幡市教育委員会により測量調査が行なわれており、直径10m前後の円墳と考えられていた。また、墳丘が腰高であることから、主体部が横穴式石室である可能性も考えられていた。美濃山遺跡は、弥生時代後期から奈良時代にかけての集落遺跡である。今回の調査地の西側に隣接する地点で、八幡市教育委員会が発掘調査を行っており、古墳時代の溝等が確認されている。

現地表面の観察から、調査対象地の中央部分は造成のために大きく削平を受けていると推察されたため、今回の調査では、その北と南にA・Bの2地区を設定して調査を行なうこととした。

調査にあたっては、京都府教育委員会や八幡市教育委員会、地元内里・美濃山の自治会などにご協力いただいた。また、各大学の学生諸君や地元有志の方々の参加があった。感謝したい。この報文は、引原が執筆した。なお、調査に係る経費は、すべて京都府山城北土木事務所が負担した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 次席総括調査員 伊野近富

同 主任調査員 引原茂治

同 主査調査員 柴 暁彦

同 調査員 松尾史子

調査場所 八幡市内里柿谷、美濃山大塚

調査期間 平成22年7月26日～平成23年1月13日

調査面積 柿谷古墳1基

美濃山遺跡 400㎡

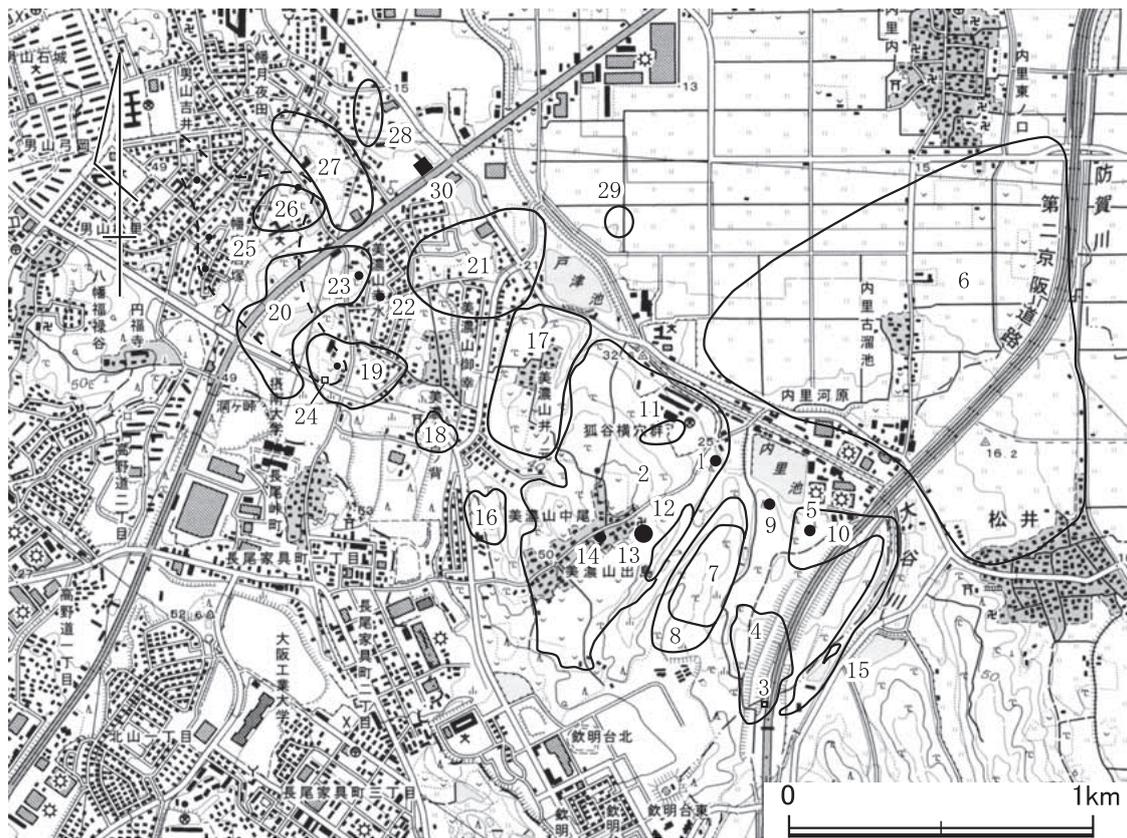
2. 位置と環境

柿谷古墳・美濃山遺跡の所在する八幡市は、京都府南部の山城盆地西部に位置する。市の西側

には、大阪府との境となる男山丘陵・美濃山丘陵が南北に横たわる。東および北側には、木津川が湾曲して流れる。この美濃山丘陵の北東側縁辺部に、柿谷古墳、美濃山遺跡が位置している。

八幡市における旧石器時代の遺跡としては、ナイフ形石器が出土した金衛門垣内遺跡や荒坂遺跡及び宮ノ背遺跡がある。縄文時代の遺跡としては、金衛門垣内遺跡や晩期の土器が出土した内里八丁遺跡がある。弥生時代以降は、遺跡の確認例が増える。弥生時代中期では、集落跡として内里八丁遺跡、金衛門垣内遺跡、方形周溝墓群が調査された幸水遺跡がある。弥生時代後期では、備前遺跡、西ノ口遺跡、宮ノ背遺跡、美濃山廃寺下層遺跡などがある。これらの中には、「戦乱」に対応するため高所に営まれた「高地性集落」に類する遺跡もある。

古墳時代前期から中期にかけては、男山丘陵周辺に、石不動古墳、茶臼山古墳、西車塚古墳、東車塚古墳などの前方後円墳・前方後方墳が築造される。王塚古墳は、古墳時代前期末から中期初頭頃に築造された前方後円墳と考えられている。また、ヒル塚古墳は、粘土槨を主体部とし、方格規矩鏡や武器類を副葬する大形の方墳である。後期には、美濃山丘陵を中心に女谷・荒坂横穴群や狐谷横穴群などの横穴墓が多数営まれる。同時期の集落跡としては、木津川河床遺跡や内



- | | | | |
|--------------|--------------|----------------|-----------|
| 1. 柿谷古墳 | 9. 内里池南古墳 | 17. 金右衛門垣内遺跡 | 25. 南山古墳群 |
| 2. 美濃山遺跡 | 10. 女谷・荒坂横穴群 | 18. 宮ノ背遺跡 | 26. 南山遺跡 |
| 3. 御毛通古墳 | 11. 狐谷横穴群 | 19. 西ノ口遺跡 | 27. 山田遺跡 |
| 4. 荒坂遺跡 | 12. 美濃山横穴群 | 20. 備前遺跡 | 28. 山田東遺跡 |
| 5. 荒坂古墳 | 13. 王塚古墳 | 21. 幸水遺跡 | 29. 五反田遺跡 |
| 6. 新田遺跡 | 14. 小塚古墳 | 22. 東二子塚古墳 | 30. ヒル塚古墳 |
| 7. 美濃山廃寺 | 15. 御毛通遺跡 | 23. 西二子塚古墳 | |
| 8. 美濃山廃寺下層遺跡 | 16. 宮ノ背西遺跡 | 24. 西山廃寺(足立寺跡) | |

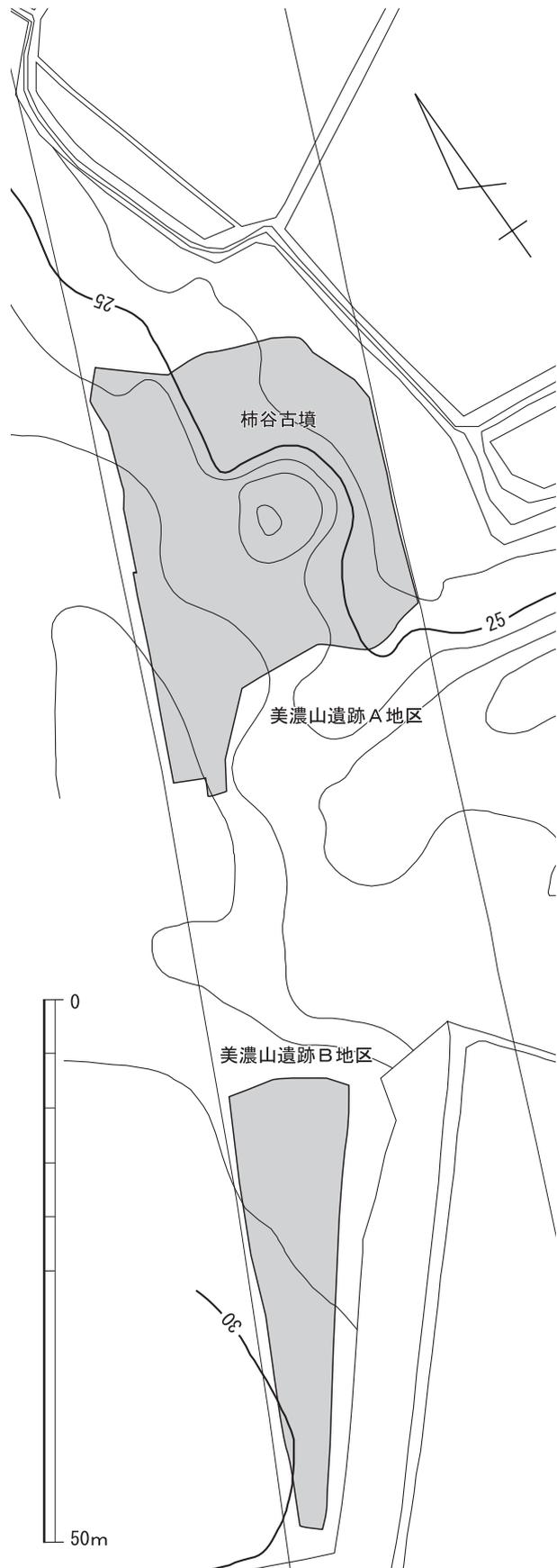
第1図 調査地及び周辺遺跡分布図

里八丁遺跡などの、低地に位置する遺跡がある。

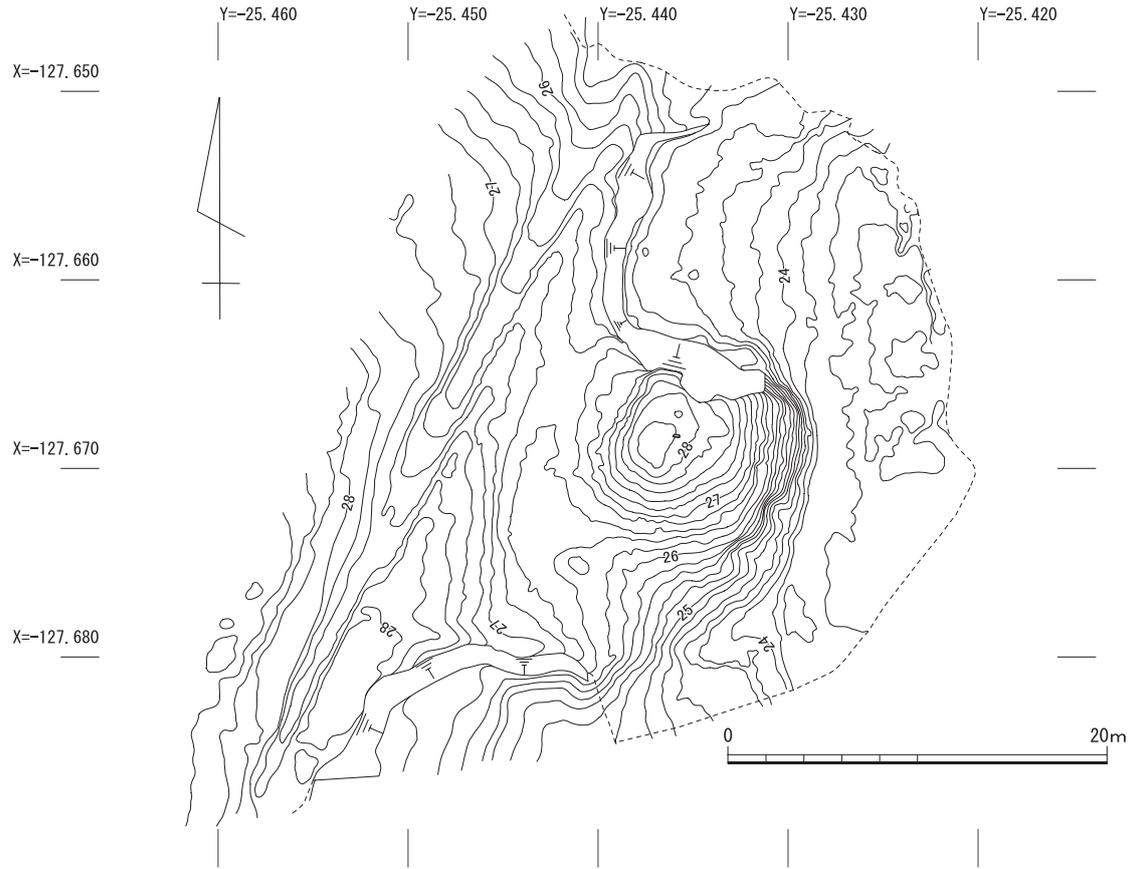
志水廃寺、西山廃寺では、堂塔跡や瓦窯跡が確認され、7世紀後半から末頃の創建と考えられている。美濃山廃寺では、建物跡や溝などが検出され、奈良三彩壺片などが出土している。集落跡としては、内里八丁遺跡、上奈良遺跡、女郎花遺跡、荒坂遺跡などがある。内里八丁遺跡では、瓦や墨書土器などが出土しており、注目される。また、中国唐時代の絞胎陶枕片なども出土しており、遺跡の性格を考える上で示唆的である。上奈良遺跡は、『延喜式』に記載されている「奈良園」の候補地とみられており、則天文字などを記した墨書土器が出土している。生産遺跡としては、四天王寺の創建瓦を焼成した平野山瓦窯がある。また、平安時代には、木津川に面した男山丘陵北側の頂部に、石清水八幡宮が勧請される。中世の遺跡としては、内里八丁遺跡、上奈良遺跡、上津屋遺跡などがある。上奈良遺跡では、中世の井戸跡から木造仏座像の膝部が出土している。

3. 調査経過

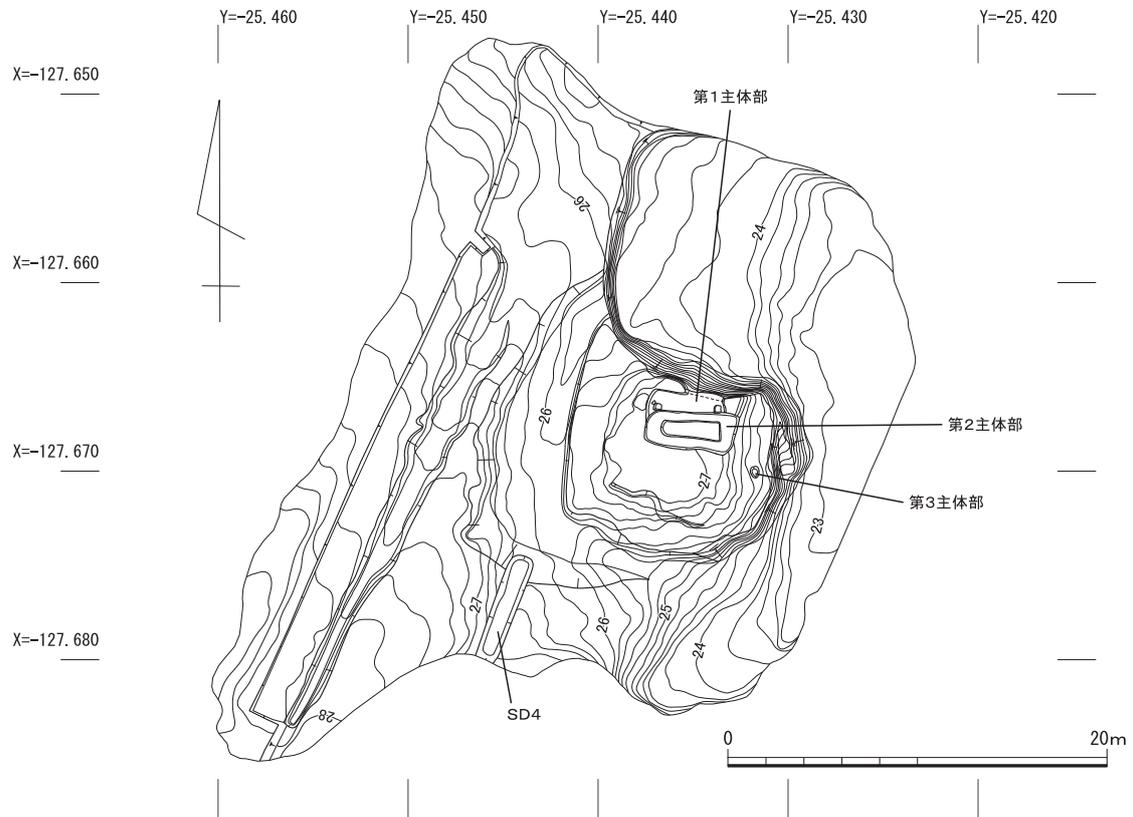
今回の調査は、平成22年7月26日から開始した。調査地は、南東から北西に伸びる丘陵の北東側斜面に位置しており、一帯は竹林および荒蕪地となっている。柿谷古墳の調査を行うためには竹林を広範囲に伐採する必要があったので、まず、伐採の必要のない美濃山遺跡B地区から調査を開始した。この地区では古墳時代から中世にかけての土坑・溝等の遺構を検出した。その後、美濃山遺跡A地区でも、竹の無い部分につ



第2図 調査区配置図



第3図 柿谷古墳調査前地形図



第4図 柿谷古墳地形図

いて人力で掘削を開始した。

伐採の終了を待って、柿谷古墳と美濃山遺跡A地区を一体化して重機掘削を開始した。柿谷古墳の墳丘については、すべて人力で掘削・精査を行なった。その結果、柿谷古墳は古墳時代後期の方墳であることが判明した。また、埋葬施設として木棺直葬の主体部2基と甕棺墓壙1基を検出した。最終段階で、墳丘下部から古墳築造時の祭祀に関係すると考えられる小墳丘を確認した。同時に美濃山遺跡B地区の埋め戻しを行ない、平成23年1月13日に現地調査を完了した。この間、平成22年12月23日に現地説明会を実施した。73名の方々が参加された。

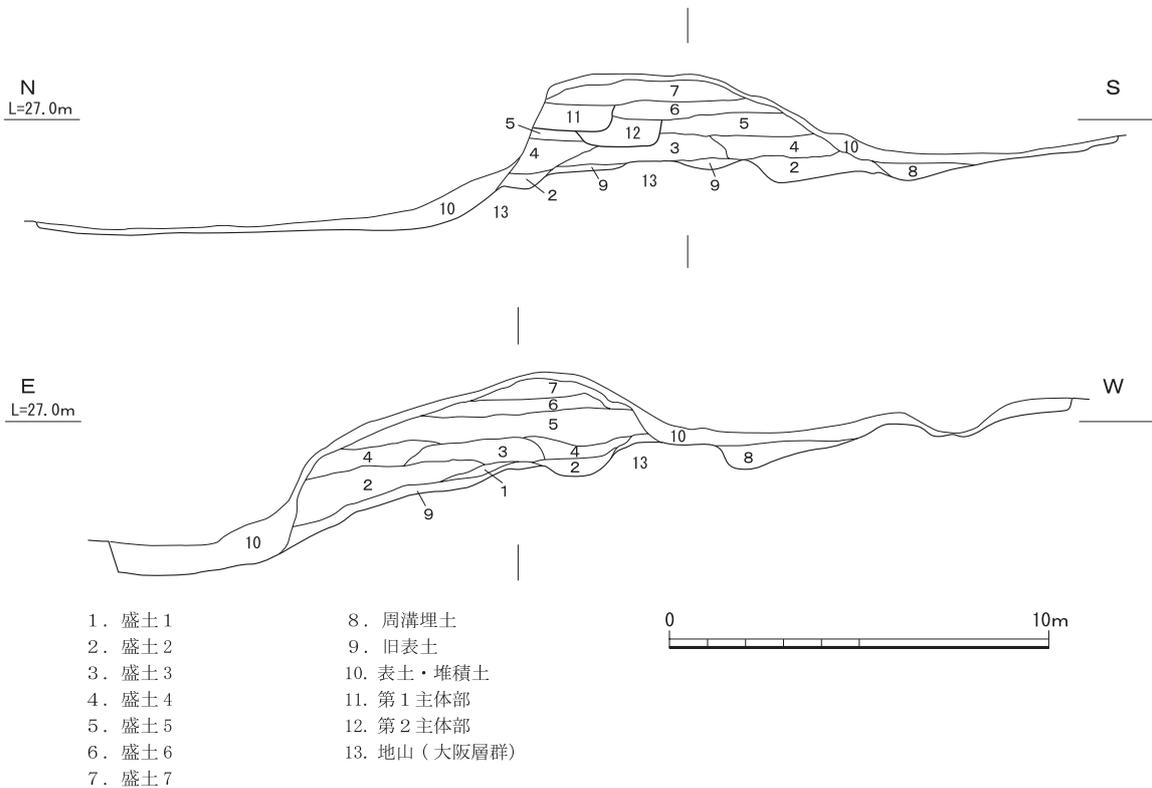
4. 柿谷古墳の調査

調査前の古墳の墳頂部には、中世後期頃以降のものと思われる石造五輪塔の水輪部や一石五輪塔の水・地輪部があり、下部に中世の墓壙などがあることも予想された。調査の結果、そのような遺構は確認できず、付近にあった石塔が、古墳上に集められて祀られていたものと推測される。

この古墳は、後世の開墾などで周囲を削り取られている。特に、北側では著しい。元の状態が比較的良く残っている西側では、墳丘の裾が直線的に延びており、一辺約12mの方墳と考えられる。西及び南側では、3～5mの周溝が残存している。この古墳では、埋葬施設として、墳頂部で木棺直葬の埋葬主体部を2基、墳丘東裾部から甕棺墓壙1基を検出した。第1主体部の調査段階で都出比呂志理事に現地指導をしていただいた。

1) 層序

古墳築造前の旧地形は、西側から東側に向かって下降する斜面地である。この斜面地に「コ」



第5図 柿谷古墳断面図

字状の溝を旧表土上から掘り込んで、一辺6mの方形区画を設ける。盛土1が部分的に盛られ、小墳丘状を呈する。この小墳丘に伴う埋葬施設はなく、その性格は不明である。旧表土上から須恵器が出土しており、墳丘築造時の祭祀などに係るものである可能性も考えられる。この小墳丘については、「下層墳丘」として、後に記述する。

小墳丘上に盛土2を置いて、上面をほぼ水平にする。この盛土は、東側では1m以上に及ぶ。この平面上のほぼ中央に、盛土3を山形に盛る。粒子の細かいシルト状のよく締った盛土で、盛土の単位は細かい。さらにその周辺に盛土4を盛って、上面をほぼ水平にする。この平面上に盛土5を置き、その上面から第2主体部の墓壙を掘り込んでいる。

第2主体部の埋葬後に、盛土6を盛って墳頂部を整える。粒子の細かいシルト状の盛土である。追葬の第2主体部の墓壙は、この盛土上面から掘り込まれる。第2主体部の埋葬後に、盛土7で墳頂部を覆っているものと考えられる。その上を、腐食土系の表土が覆っている。

2) 第1主体部

墓壙は、長さ4m、幅2mを測る。主軸方向は、N-87.5°-Wで、ほぼ東西方向である。墳丘全体から見れば、やや北側寄りに位置する。この墓壙内に、長さ2.9m、幅1mの「H」字形の組合せ式木棺を埋葬する。木棺の木口板を粘土塊で押える。

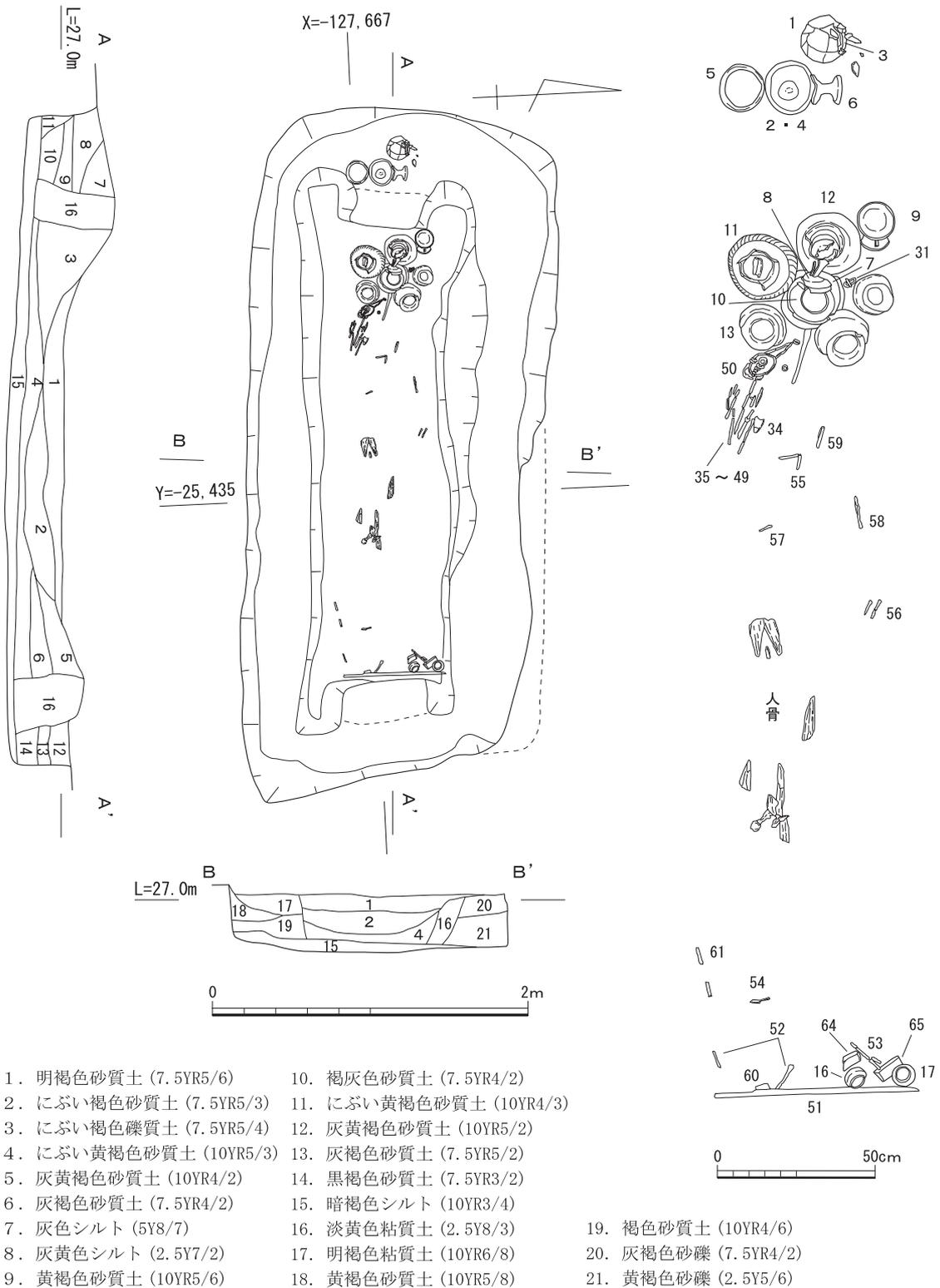
棺内西側から、須恵器壺6点や高杯2点、鉄製馬具の轡、鉄地金銅貼胡籙の一部や鉄鏃などが出土した。須恵器は、短頸壺を乗せた高杯を中心に、5個体の壺が取り巻くように配置される。その北西側に高杯1個体が配される。短頸壺上からさらに1個体の高杯が割れた状態で出土している。あるいは、短頸壺の蓋に転用されたものとも考えられる。鉄地金銅貼胡籙は、これらの須恵器の間に落ち込んでおり、棺上に置かれたものが棺の腐朽に伴って転落した可能性もある。棺中央部付近では、人骨の一部が残存していた。良好な残存状況とは言い難いが、大腿骨や骨盤の一部かと考えられる骨もある。遺存状況が悪く、確実なことはわからないが、人骨の配置にやや乱れが認められ、再埋葬された可能性も考えられる。棺東側木口付近からは、鉄剣1振、須恵器小壺2点、砥石2点等が出土した。剣は、木口に沿って置かれていた。全体的にみると、西側の方に副葬品が集中しており、遺体の頭位は西側の可能性もある。

また、棺西側木口外側で、木口板押えの粘質土の上面付近から須恵器高杯1点や杯蓋2点、杯身3点が出土しており、棺埋納後に置かれたものとみられる。この主体部から出土した須恵器は、陶邑編年のTK43型式期並行期のものとみられ、6世紀後半頃と考えられる。

3) 第2主体部

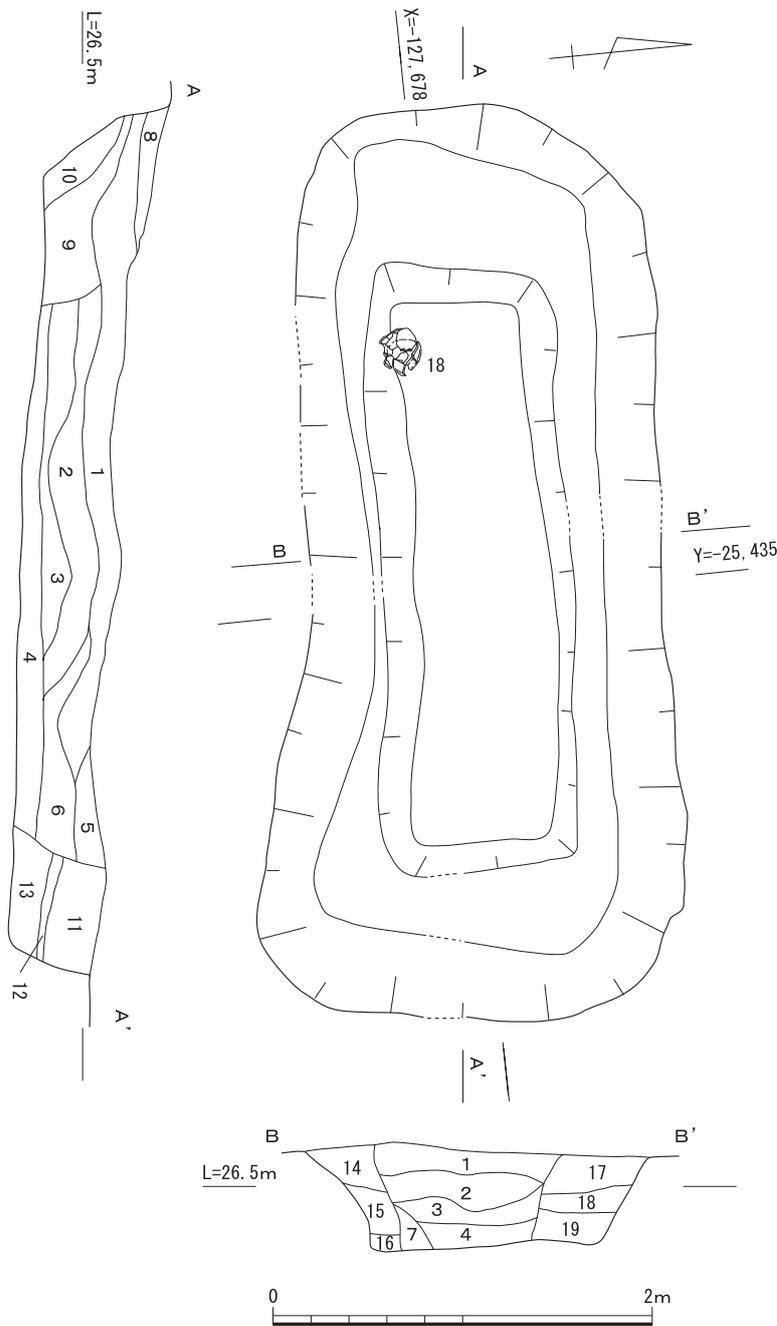
第1主体部の下から検出しており、それより古い主体部と考えられる。墓壙の主軸方向は、N-8°-Wで、ほぼ東西方向である。長さ4.8m、幅1.8～2.2mを測る。墳丘全体から見れば、ほぼ中央に位置する。この墓壙内に、長さ2.8m、幅1mの箱式木棺を埋葬する。木棺の西側木口板を礫混じりの土で押える。棺内西側から須恵器壺1点が出土した。棺底部からの出土ではないので、棺上に置かれていたものが転落したのと考えられる。

4) 第3主体部



第6図 柿谷古墳第1主体部実測図

墓壙は、墳丘の東側裾部付近に設けられている。後世の削平によって東半部を欠くが、直径1.3 mの土壇に、須恵器甕を埋納していたものと考えられる。須恵器甕は、底部の破片がなく、人為的に打ち欠かれたものとみられる。このような状況から、須恵器甕は甕棺として使用されたものと考えられる。甕内部から、須恵器短頸壺2点、高杯1点が出土した。



- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1. 赤褐色砂質土 (5YR4/6) | 11. 灰褐色砂質土 (7.5YR4/2) |
| 2. にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/3) | 12. 灰白色シルト (5Y7/2) |
| 3. 明赤褐色砂質土 (7.5YR5/6) | 13. 橙色砂質土 (7.5YR6/8) |
| 4. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3) | 14. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3) |
| 5. 黒褐色細砂質土 (10YR3/1) | 15. にぶい赤褐色細砂質土 (5YR5/4) |
| 6. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) | 16. 明灰黄色砂質土 (2.5Y5/2) |
| 7. 暗褐色砂礫 (7.5YR5/6) | 17. にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/3) |
| 8. にぶい赤褐色砂質土 (5YR5/4) | 18. 明褐色砂質土 (7.5YR5/8) |
| 9. にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/3) | 19. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) |
| 10. 明赤褐灰細砂質土 (5YR4/6) | |

第7図 柿谷古墳第2主体部実測図

5) 下層墳丘

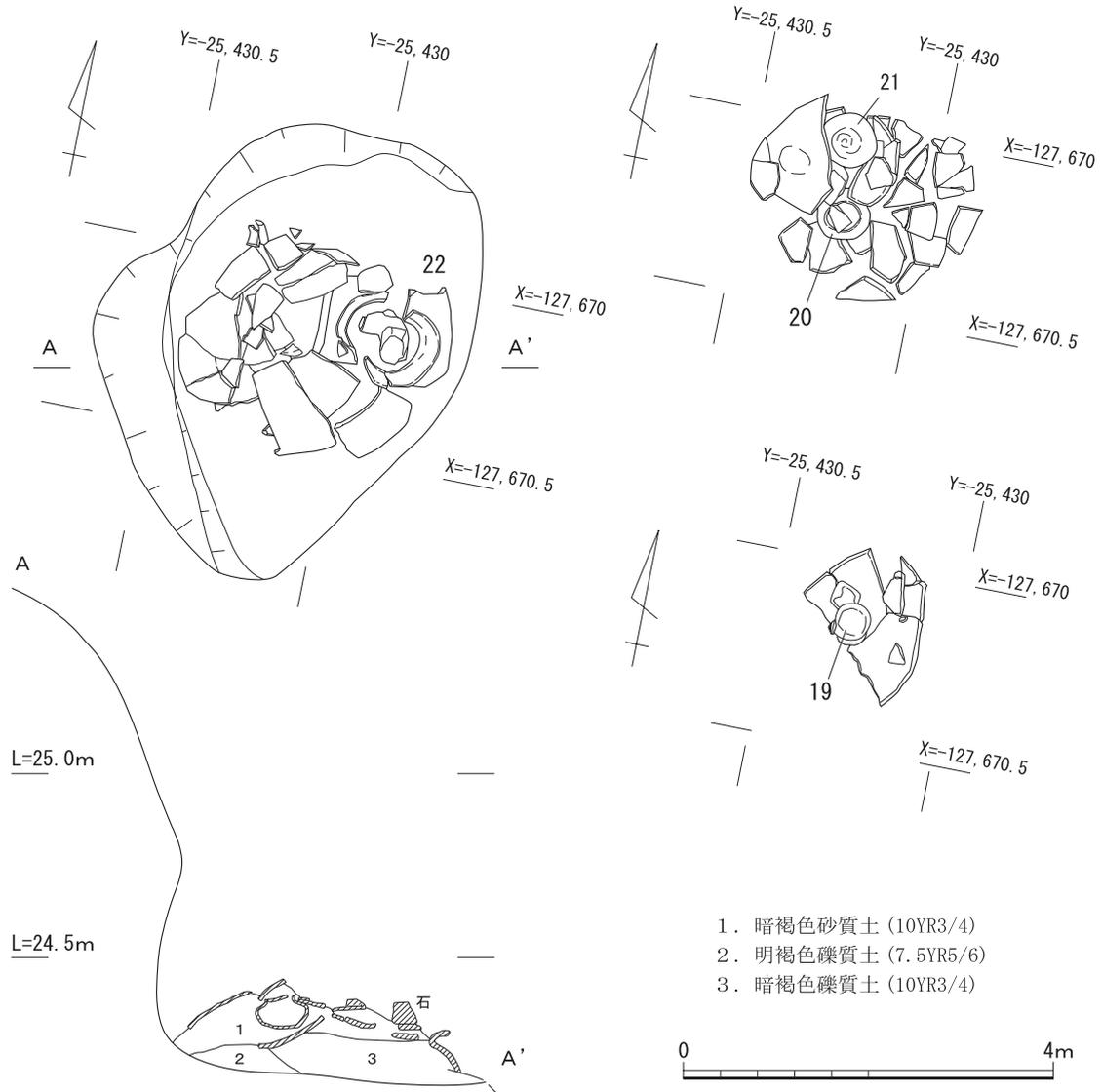
墳丘の断ち割りで、古墳築造以前の旧表土と考えられる層上から、須恵器短頸壺1点と杯蓋・杯身それぞれ1点が置かれたような状態で出土した。そのため、墳丘盛土を除去して調査したところ、幅1.6m、深さ0.3mの周溝を巡らせた一辺6mの小墳丘を検出した。この墳丘に伴う埋葬施設は無く、古墳築造に関する祭祀遺構の可能性が考えられる。須恵器は、陶邑編年のTK10型式期並行期のものとみられ、6世紀中頃のものと考えられる。この古墳および第2主体部の築造時期を示すと考えられる。

5. 美濃山遺跡の調査

今回の調査地は、美濃山遺跡のなかでも東側の縁辺部にあたる。調査対象地に2か所の調査区を設定した。A地区は、柿谷古墳調査地の南西側にあたるので、古墳の調査地と一体化してほぼ同時に調査を行なった。B地区は、A地区から小さい谷状地形を隔てて南側の平坦地に設定した。

1) A地区

この地区の調査では、須



第8図 柿谷古墳第3主体部実測図

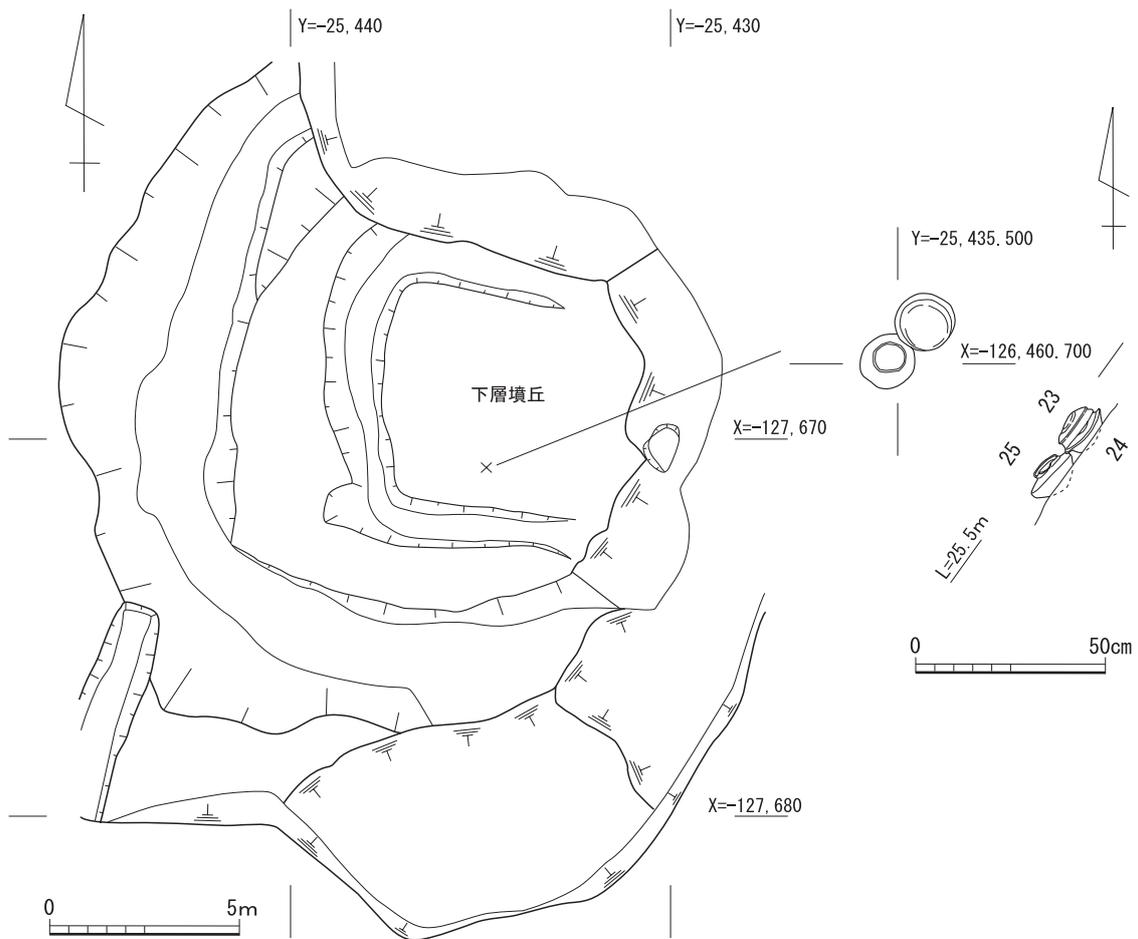
恵器や中国製白磁、石錐や剝片等の遺物が出土したが、顕著な遺構はなかった。

溝SD4 調査地南東側で検出した。幅1.4m、深さ0.8mを測る断面形箱形の溝である。ほぼ南北方向に延びる。柿谷古墳の周溝が埋まってから掘削された溝である。不明鉄製品などが出土したが、明確に時期を示す遺物は出土していない。周辺に残る地境溝と方向がほぼ揃っており、あるいは近世以降の遺構の可能性も考えられる。

2) B地区

当初、遺構面は浅い位置にあると想定していたが、近年の盛土やバラスによる厚い整地層があり、遺構面までの掘削深度は1m以上に及んだ。また、調査区中央付近では、大きく攪乱された部分もあった。この地区では、古墳時代から中世頃の遺構を検出したが、遺構密度は疎である。

土壙SK7 調査区中央西寄りで検出した。直径0.4mの不整形土坑で、深さは0.23mである。土師器大型壺の胴部片が出土した。遺構の性格は不明であるが、古墳時代前期頃の遺構とみられる。



第9図 柿谷古墳下層墳丘平面図

溝SD15 南西から北東にかけて延びる溝で、幅1m、深さ0.15mを測る。土師器小片などが出土したが、時期等は不明である。溝SD17は、南西から北東にかけて延びる溝で、幅1.8m、深さ0.24mを測る。糸切高台の須恵器小壺や布目瓦片などが出土した。9世紀頃の遺構か。

溝SD13 南西から北東にかけて延びる溝で、幅0.5m、深さ0.2mを測る。南西部が溜り状になる。瓦器小片が出土しており、中世の遺構とみられる。付近の溝SD13・14もほぼ同時期の遺構とみられる。

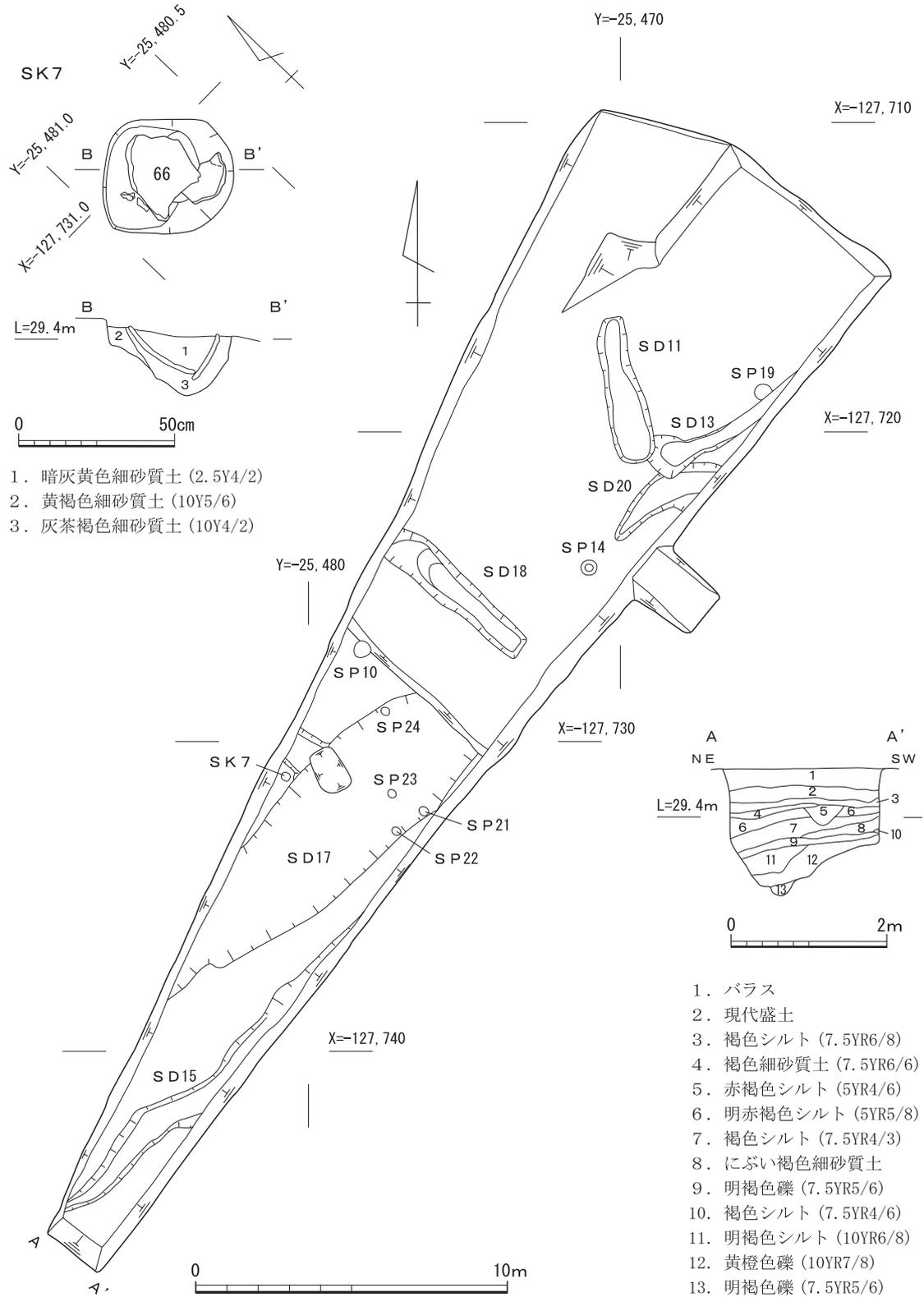
溝SD18 近年の攪乱と方向が揃っており、新しい時期のものと考えられる。その他、小ピット等を検出しているが、建物等としてまとまるものはなく、時期も、中世以降と考えられる。

6. 出土遺物

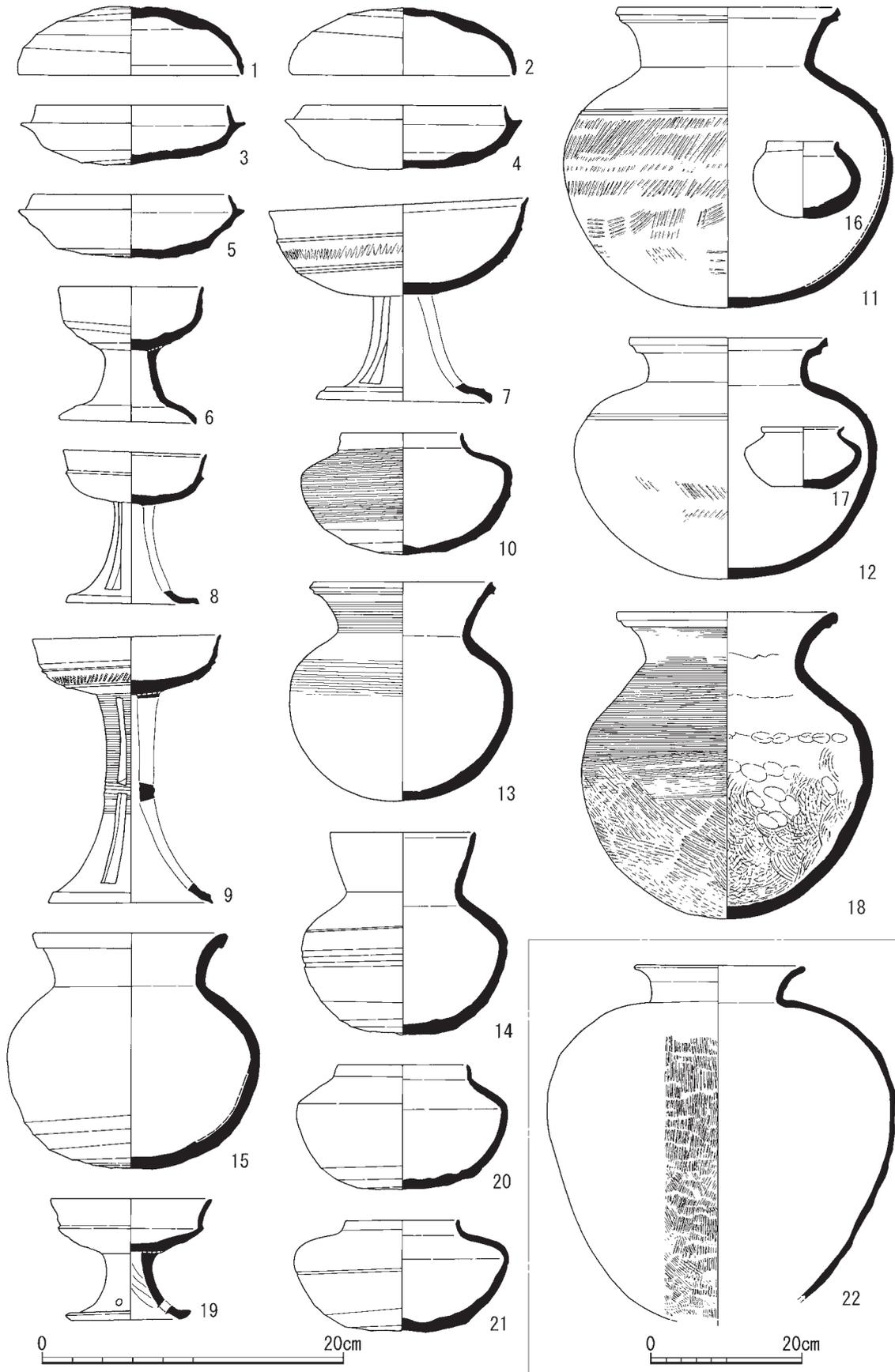
今回の調査では、須恵器や鉄製品をはじめ、様々な遺物が出土した。ここでは柿谷古墳の出土遺物を中心に、美濃山遺跡出土遺物や古墳墳頂部に置かれていた石塔残欠も含めて報告したい。なお、今回の調査で出土した遺物は、整理箱15箱である。

1) 第1主体部

(1) 土器 1～6は、棺西側木口外側から出土した。1・2は須恵器杯蓋で、天井部が丸味を



第10図 美濃山遺跡B地区実測図



第11図 出土遺物実測図(1) 柿谷古墳主体部：土器

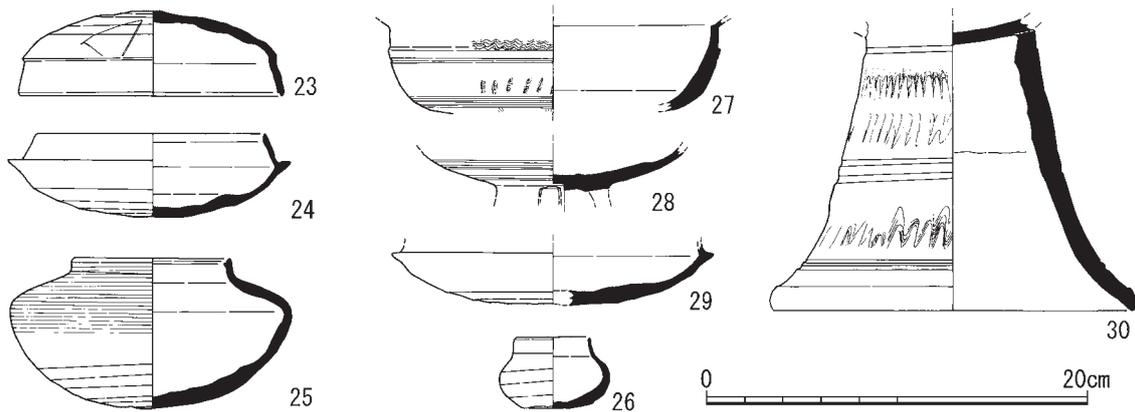
もち、端部は丸く終わる。天井部と口縁部の境に稜をもたない。1は口径14.8cm、器高4.6cm、2は口径14.7cm、器高4.5cmを測る。3～5は須恵器杯身で、口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端部には段をもたない。3は口径12.6cm、器高4cm、4は口径13.3cm、器高4.4cm、5は口径13cm、器高4.3cmを測る。以上の杯身・杯蓋は、陶邑編年のTK43型式期並行とみられる。6は須恵器無蓋高杯で、脚は端部付近で内湾気味に屈曲し稜をなす。脚部にスカシはない。口径9.4cm、器高9.1cm、脚径9cmを測る。

7～15は、棺内西側木口付近から出土した。7は須恵器無蓋高杯で、杯部は椀形である。杯部の口縁部と底部の境に稜を巡らし、その下部に2条の沈線を巡らす。稜と沈線の間には波状文を施す。脚部には3方向に長方形のスカシを施す。脚端部付近に稜をもつ。口径17.3cm、器高13.4cm、脚径11.6cmを測る。8は須恵器無蓋高杯で、杯部の口縁部と底部の境に稜をもち、口縁端部にわずかな段がある。脚部には3方向に長方形のスカシをもつ。口径9.4cm、器高10.3cm、脚径8.8cmを測る。9は須恵器無蓋高杯で、長脚二段スカシである。長方形のスカシを3方向に施す。脚部上半部はカキ目調整である。杯部は、口縁部と底部の境に稜をもち、その下部に沈線を巡らす。稜と沈線の間には刺突列点文を施す。口径12.5cm、器高18cm、脚径11cmを測る。10は須恵器短頸壺で、やや扁平気味の器形である。肩部から腰部にかけてカキ目調整である。口径8.1cm、器高8.2cmを測る。11は須恵器広口壺で、口縁端部は屈曲して外反しさらに斜め上方に短く屈曲して受口状になる。肩部に2条の沈線が巡り、沈線以下は細かい平行タタキのナデ調整である。内面はタタキ目を丁寧にナデ消す。口径14.7cm、器高20.2cmを測る。12は須恵器広口壺で、器形・調整は11とほぼ同様である。外面胴部のナデ調整は丁寧に、タタキ目がほとんど消えている。口径13cm、器高16.2cmを測る。13は須恵器広口壺で、頸部および肩部にカキ目調整がみられる。口径11.8cm、器高14.7cmを測る。14は須恵器直口壺で、口縁端部は丸く終わる。肩部に細い1条の沈線、胴上部に太めの沈線2条が巡る。口径9.6cm、器高13.6cmを測る。15は須恵器広口壺で、口縁端部が玉縁状になる。口径13.7cm、器高15.8cmを測る。

16・17は、棺内東木口付近から出土した。16は須恵器小形短頸壺で、器胎は厚目である。焼成は軟である。口径4.6cm、器高5.1cmを測る。17は須恵器小形広口壺で、口縁端部は受口状になる。算盤玉形のやや扁平な器形であり、底部は平底である。口径5.5cm、器高4.2cmを測る。

(2) 鉄製品 31～33は、出土状況から一連の胡籙金具とみられる。棺内西側木口の須恵器群の間から出土した。31は胡籙本体と吊上げ用ベルトを連結するための鉸具とみられる。長さ5cm、幅2.5cmを測る。32は鉸を打った金具である。幅2.6cmを測る。33は鉄地金銅貼の飾金具である。胡籙本体の木部が付着して残存する。金箔貼銅版と鉄板を重ね、さらに布を挟んで、胡籙本体に2列の鉸で打付けている。鉸は32よりも小振りである。線彫はない。金具の外側に均等にはみ出した布が部分的に残る。金具は残存長34cm、幅2.4cm、厚さ0.15cmを測る。

34は腸袂をもつ平根式の鏃である。残存長4.05cm、幅2.25cm、厚さ0.4cmを測る。35～49は長茎鏃で、胡籙金具付近から出土した。残存状況が良好な36は、長さ19.6cm、厚さ0.3cmを測る。茎部に木質が付着して残存している。



第12図 出土遺物実測図(2) 柿谷古墳墳丘ほか：土器

50は素環鏡板付轡で、銹着のため、復元展開図を掲載した。棺内西側木口の須恵器群のすぐ東側から出土した。鏡板は、直径0.8～1cmの鉄棒を楕円形に成形する。左側の鏡板は長径8.4cm、短径7.1cmを測る。右側の鏡板は長径8.8cm、短径7.5cmを測る。銜は二連銜で、左側が9.4cm、右側が10.2cmを測る。引手は、左側が17.2cm、右側が17.8cmを測る。兵庫鎖が付属する。51は剣で、棺内東側木口から出土した。全長65.2cm、刃部長53.7cm、茎部長11.5cmを測る。刃部幅3.2～3.4cm、茎部幅2.2cm、刃部厚0.6～0.8cm、茎部厚0.45cmである。

52～59は長茎鏃で、棺内に西半部に散乱して出土した。残存状態が良好な52は、長さ17.8cm、厚さ0.2～0.3cmを測る。55・56のように、折れ曲がったものもある。60は鎌と考えられ、棺内東側木口から出土した。端部を折り曲げる。残存長6.5cm、幅2.7cm、厚さ0.2cmを測る。61は刀子で、棺内西半部から出土した。長さ14.2cm以上、幅1.15cm、厚さ0.25～0.35cmである。

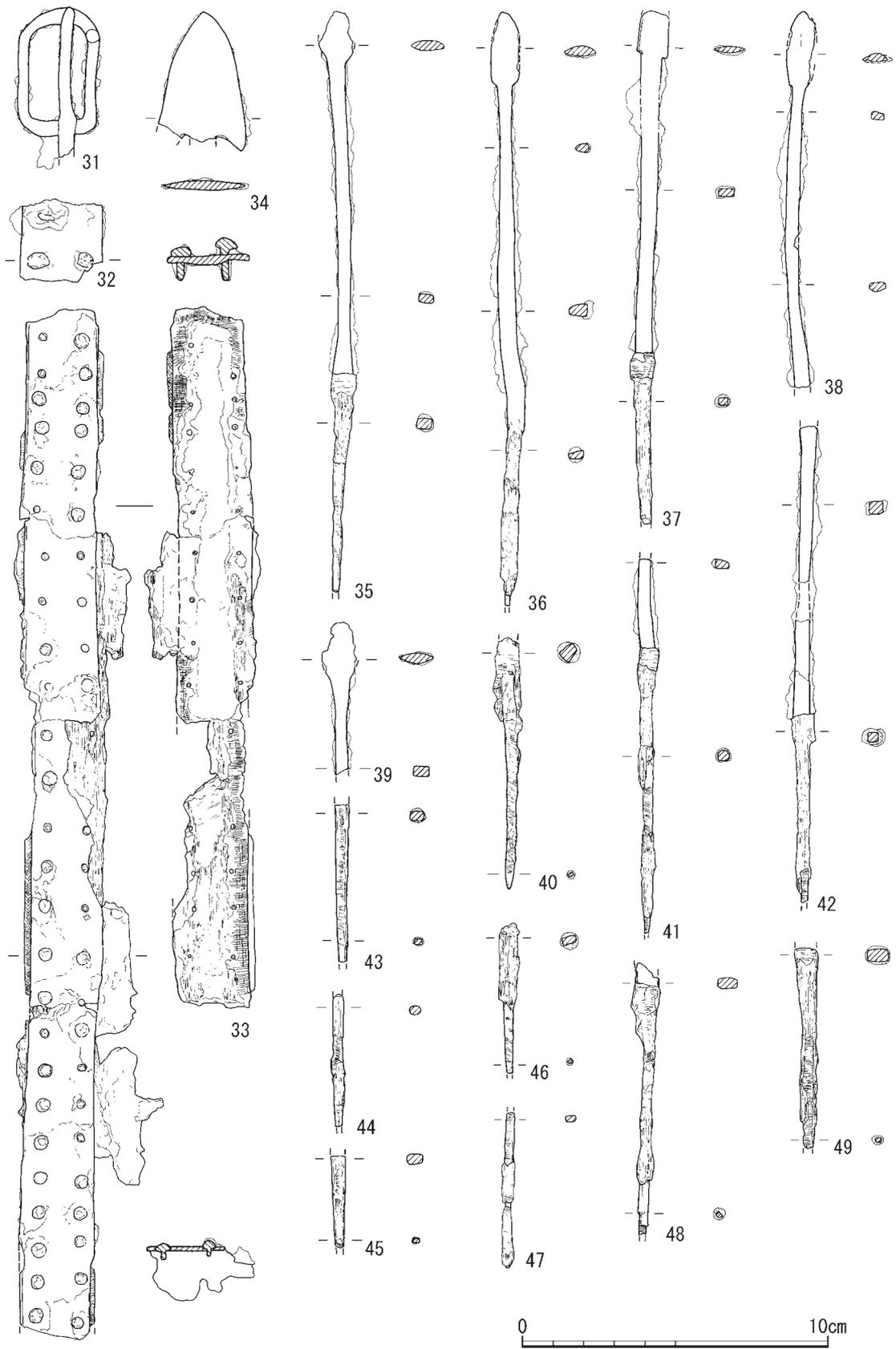
(3)石製品 64・65は砥石で、棺内東側木口から鉄剣や須恵器小壺などとともに出土した。64は長さ6.3cm、最大幅3.4cm、厚さ2.2cm、重さ79.8gを測る。65は長さ10.2cm、最大幅4.6cm、厚さ1.1cm、重さ101.7gを測る。石材は、砂岩系である。

2)第2主体部

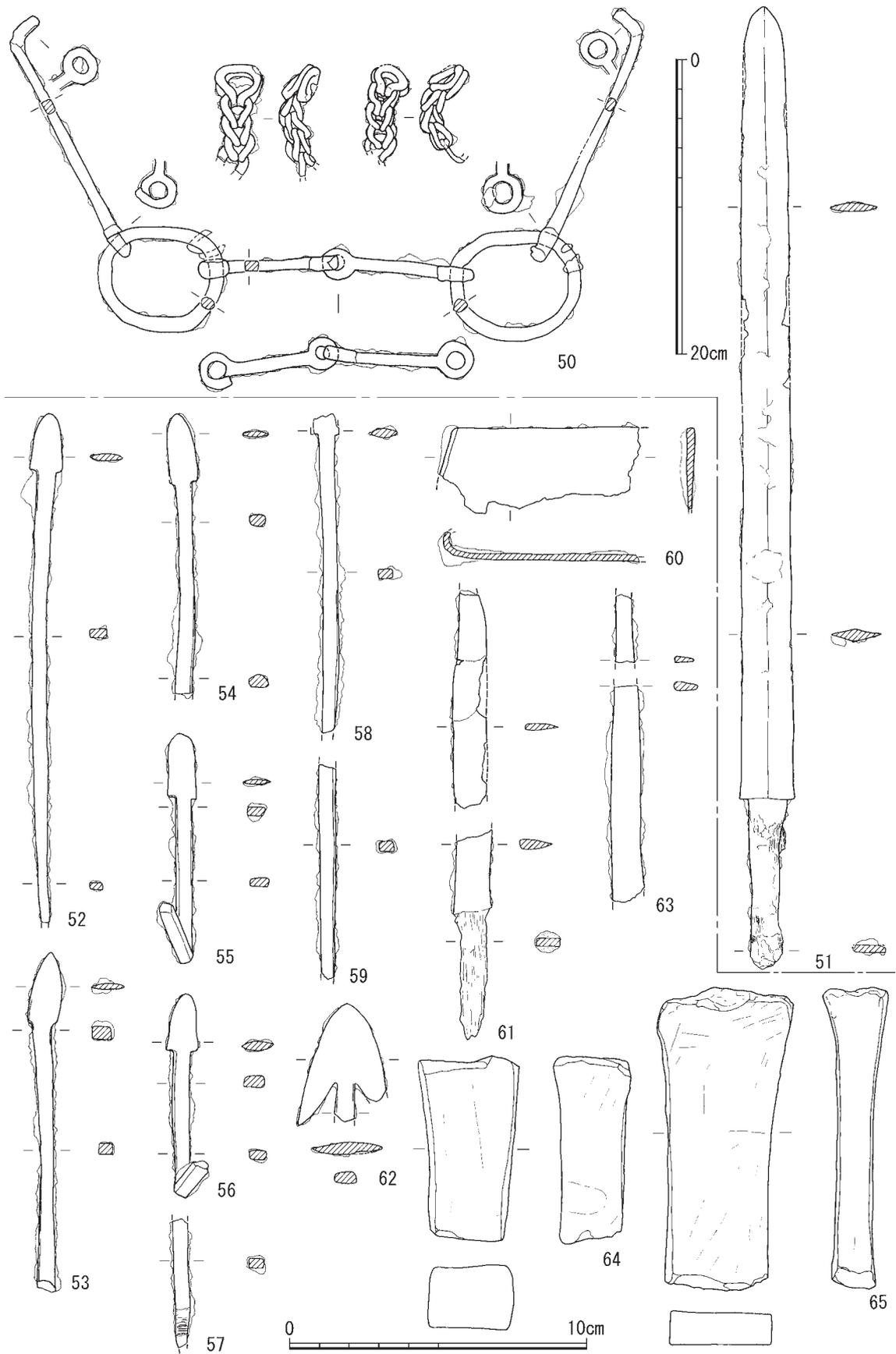
第2主体部からは、棺内南西側から須恵器1点が出土したのみである。18は須恵器広口壺で、胴部外面下半には平行のタタキ目が、上半部から頸部にかけてはカキ目調整がみられる。内面下半部には同心円状のタタキ目が残る。

3)第3主体部

甕棺を埋納した主体部である。22は須恵器甕で、棺として使用されたものとみられる。底部は、使用時に人為的に欠いたものとみられ、残存していない。口縁部は外反し、端部は丸く終わる。胴部外面には平行のタタキ目がみられる。内面は、ナデ調整によりタタキ目を消している。口径22cm、残存高50.5cmを測る。19～20は、須恵器甕に入れられていたものである。19は須恵器無蓋高杯で、杯部は底部から口縁部が外反して立ち上がり、境が稜になる。脚部には円形のスカシを3方向に施す。口径10.8cm、器高8.2cm、脚径7.3cmを測る。20は須恵器短頸壺で、肩部と胴部の境がやや角張り気味になる。口径8.6cm、器高8.4cmを測る。21は須恵器短頸壺で、やや扁



第13図 出土遺物実測図(3) 柿谷古墳主体部：鉄製品



第14図 出土遺物実測図(4) 柿谷古墳主体部ほか：鉄製品

平気味の器形である。口径7.6cm、器高7.5cmを測る。

4) 下層墳丘

下層墳丘築造前に、旧表土の上に置かれたと考えられる土器である。23は須恵器杯蓋で、天井部と口縁部の境に形骸化した稜をもち、口縁端部は段状になる。天井部に三角形のヘラ描きがある。口径13.7cm、器高4.5cmである。24は須恵器杯身で、口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端部内面にごく浅い沈線が巡る。口径12cm、器高4.5cmを測る。以上の杯蓋・杯身は、陶邑編年のTK10型式期並行と考えられる。25は須恵器短頸壺で、やや扁平気味の器形である。頸部から肩部付近にカキ目調整を施す。口縁端部に段をもつ。

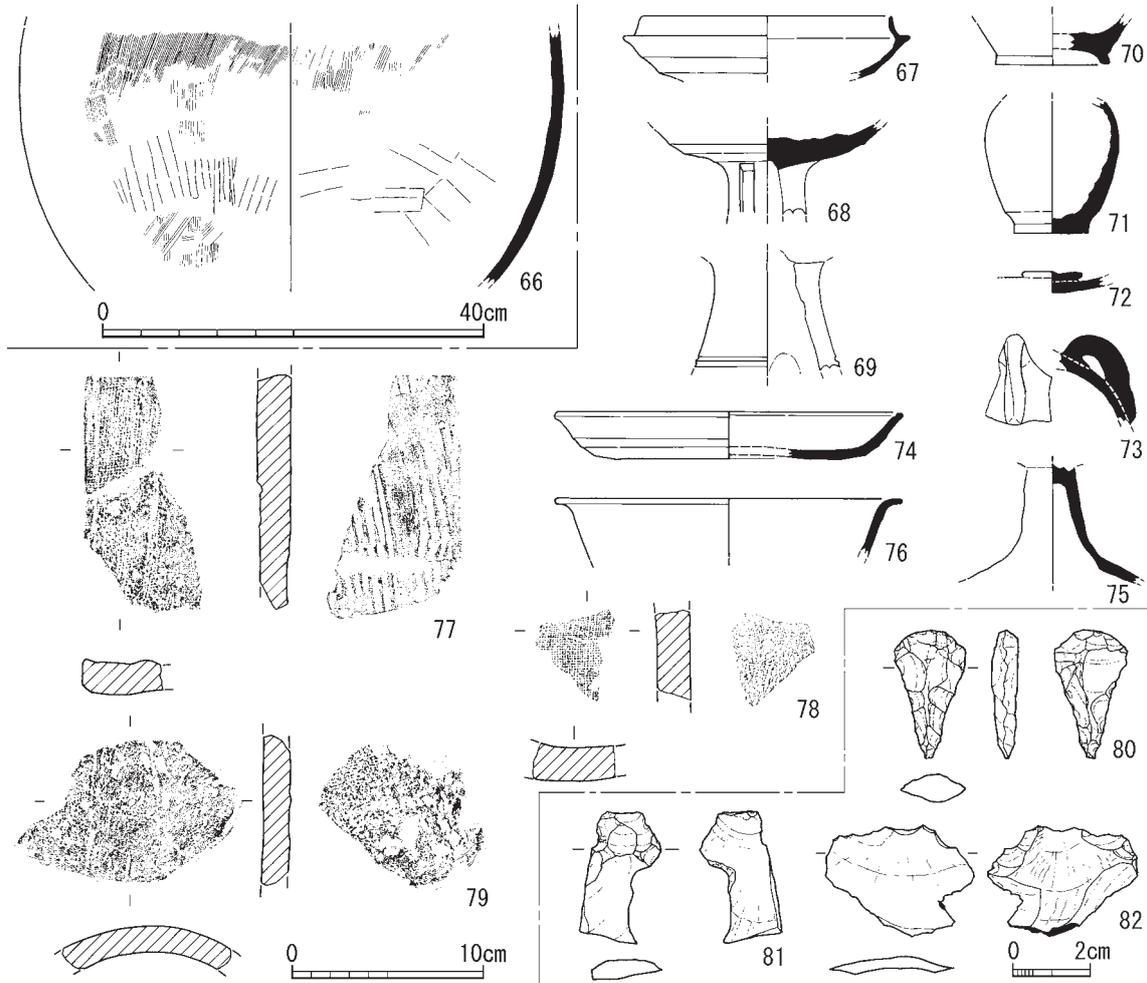
5) 墳丘

墳丘盛土・墳頂部および墳丘斜面などから遺物が出土している。26は須恵器小形短頸壺で、内面に自然釉が付着する。口径3.9cm、器高3.8cmを測る。墳丘盛土からの出土であるが、旧表土に近い層位から出土しており、下層墳丘に関連するものの可能性も考えられる。27は須恵器高杯の一部で、口縁端部は外反する。外面に波状文・刺突列点文・カキ目などを施す。胎土は暗紫色で、焼成は良好である。陶邑窯の製品か。TK208期並行と考えられ、今回出土した須恵器では最古である。南側周溝埋土から出土した。28は須恵器高杯の一部で、脚部に方形のスカシをもつ。胎土・焼成が27と類似しており、出土地点も近い。あるいは、同一固体か。29は須恵器杯身片で、墳丘東側から出土した。やや扁平気味の器形である。30は須恵器器台の脚部で、墳頂部から出土した。中央に2条の沈線を巡らし上下2段に分け、それぞれに波状文を巡らす。スカシはない。脚径19cm、残存高15.5cmを測る。62は鉄鏃で、腸袂のある平根の鏃である。残存長4.05cm、幅2.25cm、厚さ0.4cmを測る。墳丘東側の表土掘削中に出土した。

6) 美濃山遺跡

(1) 土器・陶磁器 66は土師器壺の胴部で、復元最大胴径は57cmであり、大型の壺である。古墳時代前期頃のものと考えられる。B地区の土壌SK7から出土した。67は須恵器杯身で、B地区から出土した。口径13cmを測る。陶邑編年のTK43型式期平行か。68は須恵器高杯で、脚部にスカシをもつ。A地区出土である。69は須恵器高杯脚部で、スカシをもつ。B地区出土である。70は須恵器壺底部で、張付高台をもつ。高台径6cmを測る。8世紀頃の製品か。B地区出土である。71は須恵器小形壺で、胴部が卵形を呈する。高台は糸切で、高台径3.6cmを測る。9世紀頃の製品か。B地区溝SD17から出土した。72は須恵器蓋で、扁平な宝珠つまみを付す。A地区から出土した。73は須恵器瓶の肩部で、肩部に紐状の耳を付す。B地区から出土した。74は土師器皿で、口縁端部が段状になる。口径18cm、器高3cmを測る。8～9世紀頃の製品か。B地区出土である。75は土師器高杯脚部で、A地区出土である。76は中国製白磁鉢で、口径18cmを測る。A地区出土である。77は平瓦で、上面に布目、下面に粗い平行タタキ痕が残る。B地区溝SD17から出土した。78は平瓦で、上面に布目、下面に縄タタキの痕跡が残る。B地区溝SD17出土である。79は丸瓦で、下面に布目痕が残る。B地区溝SD17出土である。

(2) 石器・鉄製品 80は縦長剥片の周縁を調整して作られた涙滴形の打製石錐である。バルブ

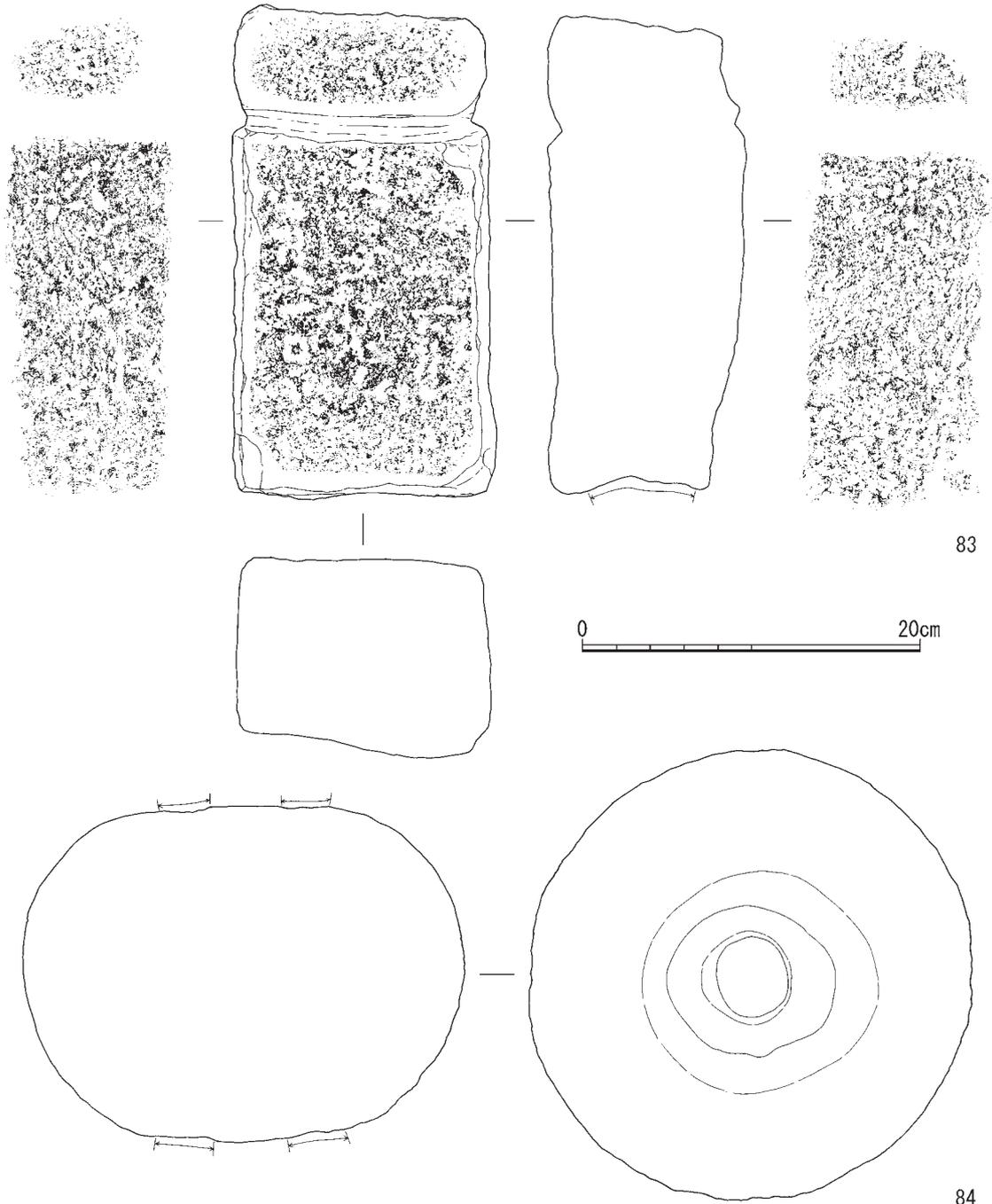


第15図 出土遺物実測図(5) 美濃山遺跡

を頭部に用い、剥片先端を錐部としてこしらえている。頭頂部に剥片剥取時の打面、b面に主要剥離面が残る。全長3.4cm、頭部幅1.85cm、錐部幅0.3cm、厚さ0.75cm、重さ3.6gを測る。サヌカイト製である。製作時期は不明である。A地区出土である。81は剥片で、全長3.5cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重さ3gを測る。サヌカイト製である。A地区出土である。82は剥片で、全長2.9cm、幅3.9cm、厚さ0.3cm、重さ3.6gを測る。A地区出土である。63は不明鉄製品で、断面の形状から、刀子の可能性もある。幅1cm、厚さ0.25cmを測る。A地区溝SD4出土である。

7) 石造五輪塔

柿谷古墳墳頂部に2点の石塔残欠が置かれていた。83は一石五輪塔の地・水輪部で、花崗岩製である。断面長方形の石材を用いており、やや扁平な石塔である。正面および左右面は平滑に調整されているが、背面は粗く仕上げるのみである。地輪正面中央上部には梵字の「ア」が刻まれる。梵字の下には3行の刻銘があるものとみられる。中央部分の刻銘は不明である。右側には年号が、左側には月日が刻まれているとみられるが、判読できない。地輪左右面ではそれぞれの中央上部に梵字があり、左面は「アン」とみられる。水輪正面にも梵字の「バ」が刻まれている。左右面にも梵字があり、左面には「バン」が刻まれている。地輪の下部6cmは平滑になってお



第16図 出土遺物実測図(6) 石造五輪塔

らず、地中に埋め込まれる部分と考えられる。残存高28.8cm、幅14.8cm、厚さ11.2cmを測る。中世末期から近世初頭頃のものと思われる。84は別石五輪塔の水輪で、花崗岩製である。上下両面に低い臍がある。表面がやや荒れており、梵字等の有無は不明である。直径24.8cm、高さ20cmを測る。中世後期以降のものと考えられる。

7. まとめ

今回の調査で、柿谷古墳は、古墳時代後期の6世紀中頃に築造された古墳であることが判明し

た。この古墳は、木棺を直葬する方墳で、横穴式石室を導入していない点で保守的な様相がみられる。ただ、鉄製馬具や鉄地金銅貼胡?などを副葬しており、当時のこの地域の有力者の墓と考えられる。

第1主体部では、棺内西側木口に高杯上に短頸壺を乗せたものを中心に5個体の壺を配する土器配置がみられた。古墳における供献の形態を示すものとして、興味深い。また、墳丘下層で、小墳丘の存在を確認した。古墳築造に伴う祭祀に関係する遺構の可能性もあり、古墳築造の過程を考えるうえで、興味深い遺構と言えよう。

この古墳の周辺には古墳の分布が少ない。周辺地域は、横穴の密集地域であり、この古墳に追葬が行なわれた6世紀後半期には、女谷・荒坂横穴群で横穴の築造が始まる。その後、7世紀前半頃にかけて横穴の築造が盛んになるのに反して、この時期以降に築造された古墳は現状では確認されていない。背景には、古墳を作る風習をもった集団の勢力が衰退し、替って、横穴を作る風習をもつ集団が新たに台頭して勢力範囲を拡大していった、というようなことがあった可能性もある。古墳時代後期に、この地域に何らかの変化があったのではないか、というようなことを想起させる。このように考えると、柿谷古墳は、この地域で最後に造られた古墳とも考えられる。八幡地域における数少ない後期古墳の調査例であり、この地域の古墳時代を考える上で、重要な資料と言えよう。

美濃山遺跡では、古墳時代から中世にかけての遺構を確認した。遺構密度は疎らであるが、それは、調査地点が集落遺跡の縁辺部であることも関係しているものと考えられる。調査範囲も限られており、今後、また調査が広範囲に行なわれることがあれば、さらに多くのことが解明されよう。今後の調査に期待したい。

参考文献

八幡市教育委員会『ヒル塚古墳発掘調査概報』1990

八十島豊成「美濃山遺跡(第2次)発掘調査報告」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第50集 八幡市教育委員会)2008

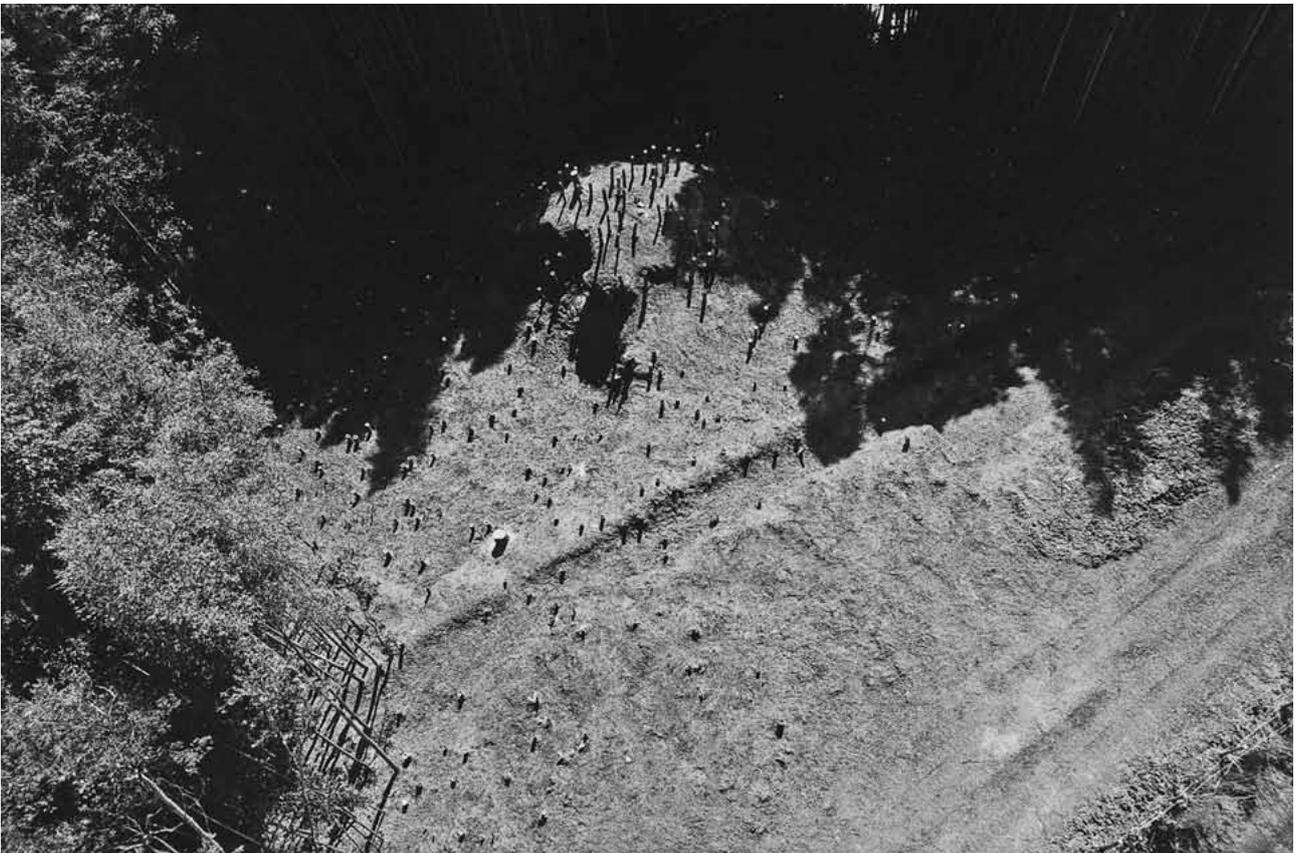
大洞真白「王塚古墳範囲確認発掘調査(第1～3次)報告書」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書』第54集 八幡市教育委員会)2010

岩松保ほか「女谷・荒坂横穴群」(『京都府遺跡調査報告書』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2004

圖 版



(1) 柿谷古墳・美濃山遺跡A地区調査前全景(西から)



(2) 柿谷古墳・美濃山遺跡A地区調査前全景(北西から)



(1) 柿谷古墳調査前全景(南西から)



(2) 柿谷古墳全景(西から)



(1) 柿谷古墳墳頂部石造物
(北東から)



(2) 柿谷古墳墳丘南断面(西から)



(3) 柿谷古墳墳丘北断面(東から)



柿谷古墳第 1 主体部(西から)



(1) 柿谷古墳第1 主体部(北から)



(2) 柿谷古墳第1 主体部西側遺物出土状況(東から)



(1) 柿谷古墳第2主体部(西から)



(2) 柿谷古墳主体部完掘状況(南西から)



(1) 柿谷古墳第3主体部(東から)



(2) 柿谷古墳第3主体部甕棺内部(東から)



(1) 柿谷古墳・美濃山遺跡A地区(北西から)



(2) 柿谷古墳・美濃山遺跡A地区(南西から)



(1) 柿谷古墳第1 主体部鉄製品出土
状況(南から)



(2) 柿谷古墳旧表土上土器出土状況
(東から)



(3) 柿谷古墳下層墳丘(西から)



(1) 柿谷古墳下層墳丘(南西から)



(2) 柿谷古墳下層墳丘(北西から)



(3) 美濃山遺跡B地区調査前全景
(北西から)



(1)美濃山遺跡B地区(北東から)



(2)美濃山遺跡B地区土壙S K 7
(北から)



(3)美濃山遺跡B地区溝S D17
(南西から)



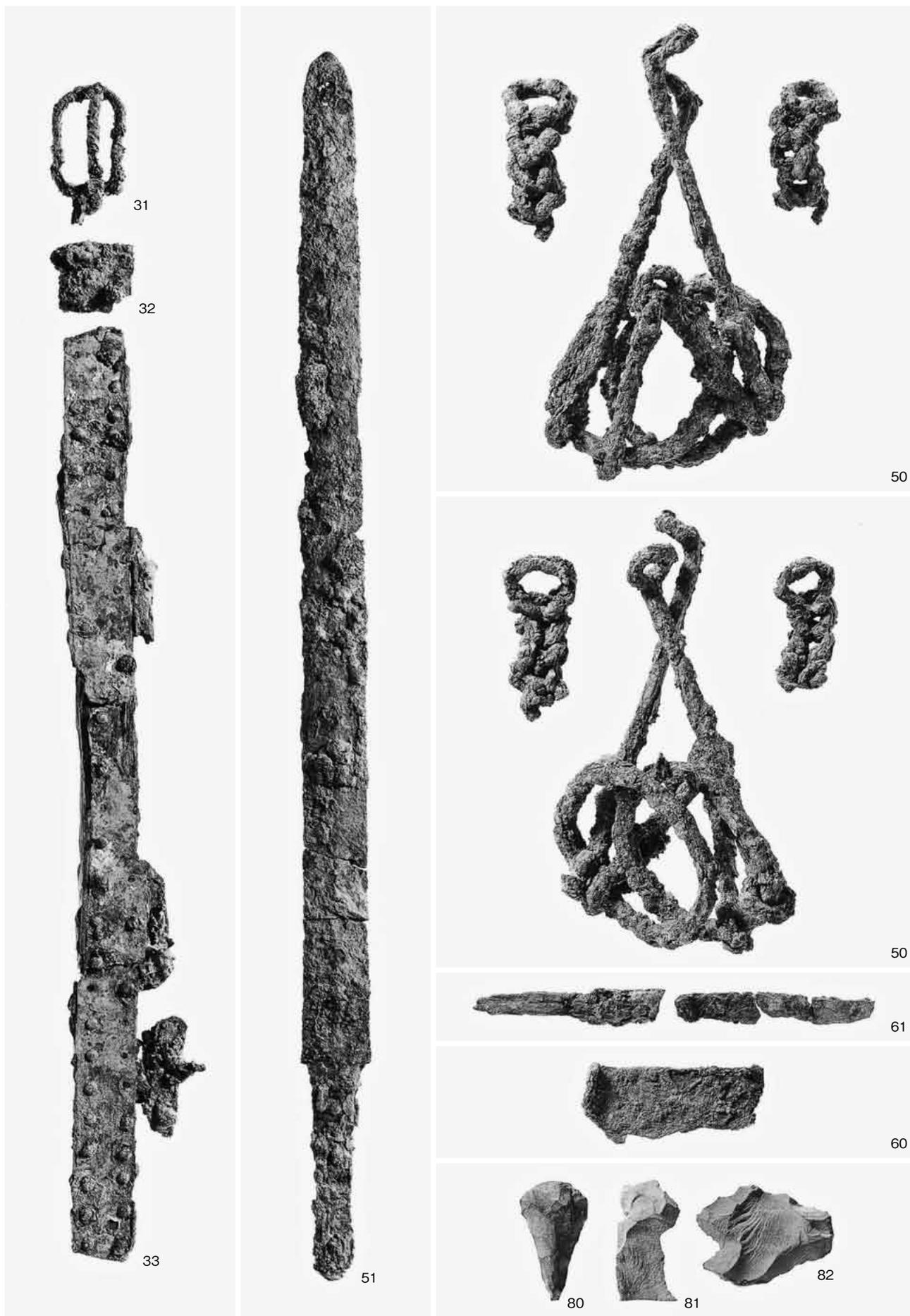
出土遺物 1 (第 1 主体部：土器)



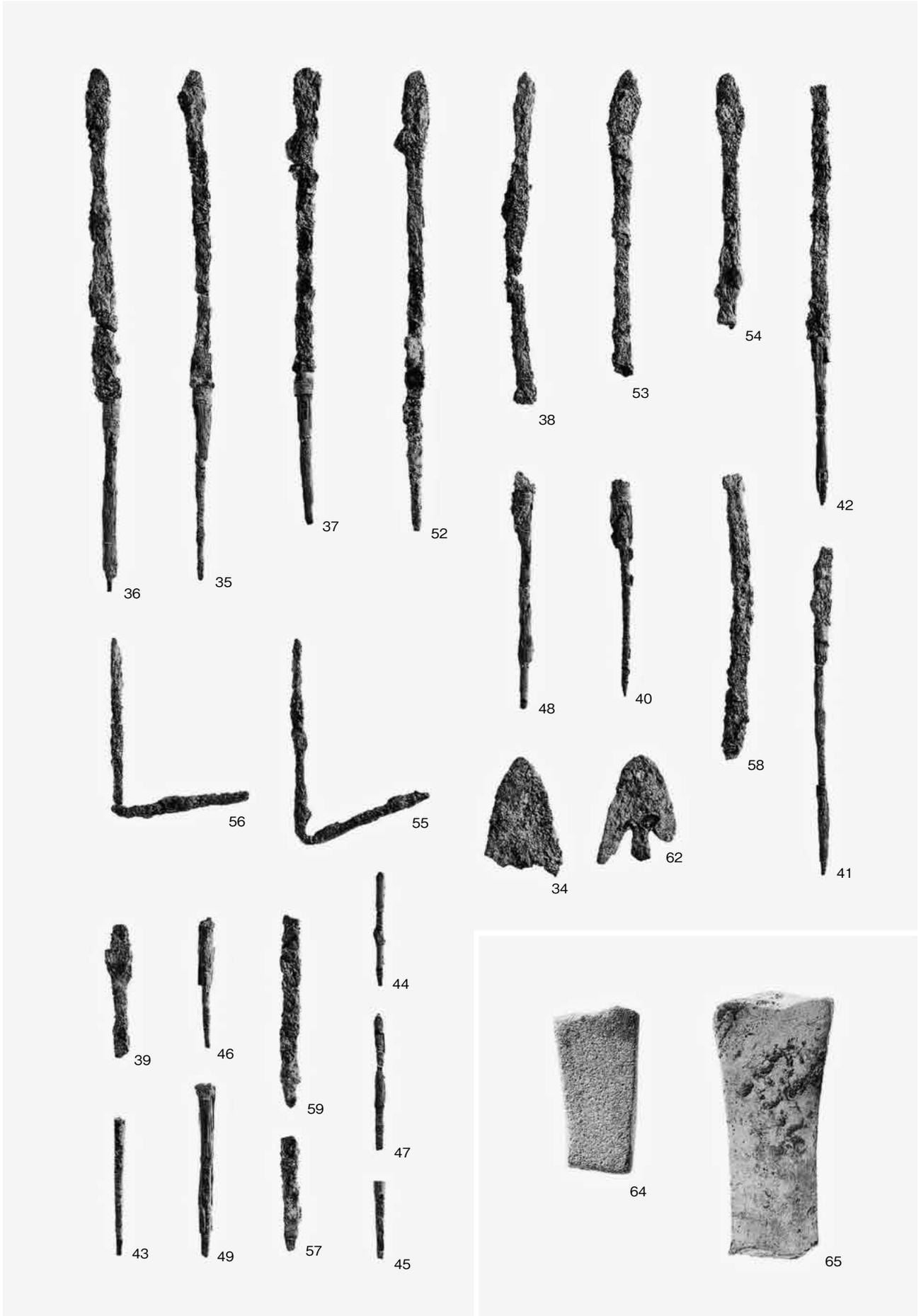
出土遺物 2 (第 1 主体部：土器)



出土遺物 3 (第 2・3 主体部、墳丘内：土器)



出土遺物 4 (鉄・石製品)



出土遺物 5 (鉄・石製品)